岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第22号
Bulletin of Morioka Junior College Iwate Prefectural University, No.22
57－63, March 2020

報告

外国史学習の動機づけに関するアンケート調査と分析
―岩手県を中心に―

A Questionnaire Survey and Analysis about the Incentive of Learning Foreign-History: in particular from Universities in Iwate Prefecture

小川知幸[*1]，安井萠[*2]，小川春美[*2]，吉原秋[*3]，鈴木道也[*4]，
津田拓郎[*5]，田村理恵[*6]，畑奈保美[*7]，出村伸[*7]，池野健[*1]
Tomoyuki OGAWA, Moyuru YASUI, Harumi OGAWA, Aki YOSHIHARA, Michiya SUZUKI,
Takuro TSUDA, Rie TAMURA, Naomi HATA, Shin DEMURA, Takeshi IKENO

Keywords: *Foreign-History, Incentive, Questionnaire Survey, Iwate Prefecture*
外国史，動機づけ，アンケート調査，岩手県

1. はじめに

われわれの研究グループは、2014年度より高校・大学間の連携を前提とした外国史に関する学習機会の確保と環境改善をめざした調査研究を継続している。とくに世界史学習における学生たちの意識調査をおこなうことで教科としての世界史を学んだ、あるいは学ばなかった学生たちが外国の歴史を学ぶということに対していかなる期待や違和感等を抱いているのかを明らかにしてきた。その結果、履修していなかった学生は少なくとも数パーセント以上、平均12（最大23）パーセントにおよんでいたが、しかし世界史学習とその必修に対しては教養や出会いやコミュニケーション、差別・過ちからの解放などといった側面から肯定的に受け止められていた。だが同時に入試や暗記等の負担感がそれ以上の学習を遠ざけているようすも明確になった（小川ら（2017）、吉原ら（2018））。

いわゆる世界史未履修問題は、暗記地獄から逃れようとした生徒たちを善意から再び鉄鎖につなぎ直したのだとの言説もある（小川（2009））。以後、世界史学習の構想には周知の通り、用語数の圧縮や学習指導要領による単元の精選、また日本史と世界史を併せた「歴史総合」の創出、そして入試改革にいたるまで、矢継ぎ早の改革・改善案が打ち出されてきた。

翻って大学では、とくに図書館を中心として自主的・能動的な学習のためのインフラ整備を推進している。Augeri (2019)と吉植（2019）は国内外の先進的な大学での事例を紹介し、学習環境がテクノロジーや既成概念からの解放によって新たな段階を迎えていること、また国内大学におけるアクティブ・ラーニング・スペースが2010年から2018年までに5倍近く（533校）に増進したことを報告している。しかし一部では利用されず放置されている実態もあるという。

鈴木ら（2018）は、人文知の実践的・価値創造的な有用性をあたえるはずの歴史学が史料読解などの狭さと深さにより、歴史好きの学生たちをかえって戸惑わせている実態を明らかにした。浦崎（2018）は、高校、大学そして社会の求めるものとそれぞれの学習段階および支援方法に大きなギャップがあるという。

2. 国際的志向性と動機づけ

ところで、「外国」とはいかにして感知されるのだろうか。旅券統計（2019）によれば直近の一般旅券有効旅券数は2993万6千470であり、日本の全人口の約24パーセント、岩手県では県人口の約9.8パーセントにすぎない（最多の東京都では約35.9パーセント）。パスポート取得率を人口数で比較すると岩手県は全国比の約0.4パーセントである。海外に出国する機会は決して多いとは言えない。一方、いわゆるインバウンドでは、日本政府観光局（2017）によれば岩手県は約0.23パーセント（下から5番目）である。このように、外国（人）を直接体験する機会は統計上きわめて限られている。ただしこれは大都市圏をのぞく日本全体でも当てはまる事実であろう。

学習とその動機づけの関係として八島（2001）は国際的志向性（International Posture）の概念を提示した。Bin Zou, Michael Thomas（2018）によれば、学習対象となる言語に関連する文化に強く惹かれ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする気持ちであるという。これが学習意欲へと作用し、学習環境や明確な目標などと相俟って学習行動へとつながるというのである。では、外国の「歴史」の学習における動機づけはいかにしてなされるのだろうか。われわれはアンケート調査を実施した。

3. アンケート調査の実施と分析

本アンケート調査は、講義終了後の15分程度で、あらかじめウェブ上に作成した調査票＜外国史への関心についての調査＞に学生がQRコードをもちいて各自スマートフォン等でアクセスして記入する方法で、2019年5

[*1] 東北大学、[*2] 岩手大学、[*3] 国際文化学科、[*4] 東洋大学、[*5] 北海道教育大学、[*6] 都城工業高等専門学校、[*7] 東北学院大学

月 23 日から 8 月 5 日にかけておこなった。ただし、今後の聞き取り調査にも使用するため、学籍番号と氏名も記入させる必要があった。したがって回答への協力は自由であり、回答内容が成績等に影響することはないと註記した。

調査項目は以下の通りである。

問 1	あなたは外国の歴史に興味がありますか？
問 2	質問 1 で「ある」「どちらかといえばある」と回答した方にお尋ねします。あなたが外国の歴史に興味を抱いたきっかけは何ですか？（いくつでも）
問 3	質問 1 で「 どちらかといえばない」「ない」と回答した方にお尋ねします。その理由として次の選択肢であてはまるものすべてにチェックをつけてください。
問 4	今まで受けた高校世界史の授業に関連して、とくに印象に残っているエピソードがあれば教えてください。
問 5	外国の歴史を知ることにはどのような意味があると思いますか？自由に記述してください。

実施校は研究グループのメンバーおよび協力者の所属する 9 校であり、回答数は 915 件であった。問 2、問 3 には具体的な選択肢を用意し、加えて記述欄も設けた。とくに問 2 では、回答者が外国の歴史に興味を抱くきっかけとなった具体的な番組名や作品名等を記述させたことが、学習者の視線の先を観察するための重要な施策であった。なお、下記の「その他」に区分された 2 件は回答者の誤記によるものと推定されるため、いずれかの実施校に分別されるはずだが、本データは研究グループに共有される最新のものであり、かつ集計結果におよぼす影響はきわめて限定的だと考えられるので、これをそのまま使用する。

実施校	回答件数
北海道教育大学	52
岩手大学	110
岩手県立大学	102
岩手県立大学盛岡短期大学部	83
盛岡大学	137
東北学院大学	176
尚絅学院大学	103
東洋大学	71
都城工業高等専門学校	79
その他	2
計	915

円グラフにすれば下記のようになる。

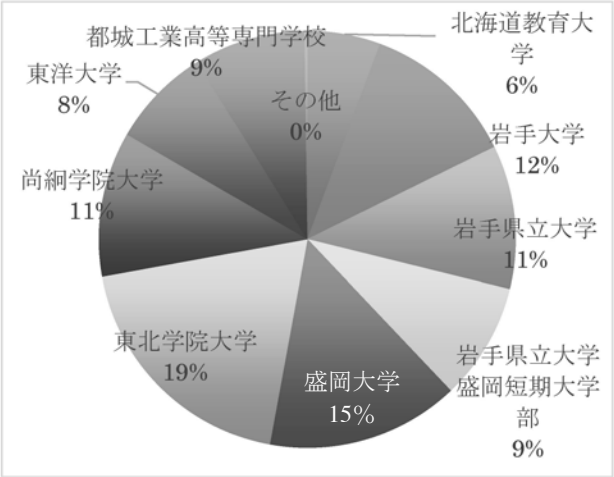

図 1：回収アンケートの実施 9 校における割合

このように実施校は北海道から東北、関東、そして九州にまでわたっているが、なかでも東北とりわけ岩手県に所在する大学が回答数の割合からみて 47 パーセントに達している。そこで本稿ではこれらの大学でのアンケート結果を全体と対比しながら検討することとしたい。

3-1. 外国史への興味

まず、問 1 の外国の歴史への興味に対する回答の集計結果は、全体では下記の通りであった。

ある	300
どちらかといえばある	347
どちらかといえばない	173
ない	95
計	915

「ある」「どちらかといえばある」をあわせると、約 72 パーセントとなる。これに対して、岩手県所在の大学における集計結果はつぎのようになる。ただし、岩手県立大学にかんしては、大学間相互の割合を揃えるために、さしあたり岩手県立大学盛岡短期大学部のみを抽出した。

	ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない	計
岩手大学	19	48	33	10	110
盛岡大学	39	57	28	13	137
盛岡短期大学部	25	26	19	14	83

「ある」「どちらかといえばある」をあわせると岩手大学では約 61 パーセント、盛岡大学では約 70 パーセント、岩手県立大学盛岡短期大学部では約 62 パーセントとなる。全体の割合と比較すれば、盛岡大学は同率に近いが、他の 2 大学はやや低いといえる。ちなみに盛岡大学でアンケートを実施したのは教育哲学を専門とする教員であり、他は西洋史（前近代）の教員である。外国史への学生の関心の度合いは、その都度の教員の専門に左右されるものでないことをしめしているともいえるだろう。この集計結果からは岩手県での数値は全体にくらべて低めだが、これが地域性によるものであるかどうかは即断できない。とはいえ一考に値するだろう。

いずれにしても学生の 3 分の 2 以上は外国の歴史に多かれ少なかれ興味を抱いていることが明らかになった。反対に、「ない」と言い切る学生は全体では約 10 パーセント、岩手大学および盛岡大学においてはともに約 9 パーセント、岩手県立大学盛岡短期大学部では約 17 パーセントにおよんだ。したがって、そうした学生はつねに 1 割程度は存在すると推定されるのだが、盛岡短期大学部において高率なのは何故だろうか。修学期間が比較的短いことから、学生の関心が別の分野に振り向けられているのかもしれないが、この点については別途考察を要する。

3-2. 興味を抱いたきっかけ

つぎに、回答者が外国の歴史に興味を抱いたきっかけとして、複数回答によりそのジャンルを選択肢から選ばせた。

盛岡大学、岩手大学、岩手県立大学盛岡短期大学部の 3 校では、盛岡大学を基準にして降順に並べると下記の通りであった。

	盛岡大学	岩手大学	盛岡短期大学部
映画	47	21	25
高校の世界史の授業	40	20	24
テレビ番組	34	43	19
マンガ・アニメ	32	21	40
ゲーム	32	6	9
小説	20	4	10
海外旅行・研修・留学	18	18	17
外国語学習	15	10	13
その他	8	4	2
計	246	147	159

盛岡大学について図にすればつぎのようになる。

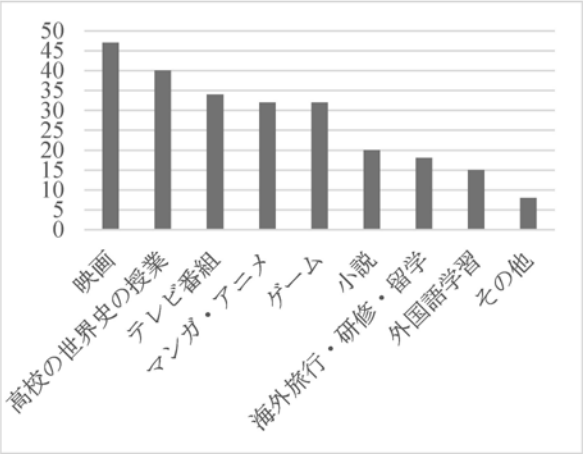

図 2：外国の歴史に興味を抱いたきっかけ（盛岡大学）

具体的な番組名や作品名等は別表に掲げるが、この結果をみれば、予想以上に映画をきっかけとするものや（47 件＝約 19 パーセント）、高校の世界史の授業をきっかけとするものが多い（40 件＝約 16 パーセント）。依然として世界史の授業は、外国史への間口を広く提供しているといえよう。映画は、シャーロック・ホームズや三國志、キング・アーサー、ハンニバル、ハリー・ポッターなどの歴史系、またファンタジー系がしばしば挙げられている。いわゆるハリウッド映画であるが、映画館での鑑賞というよりは、おそらくテレビ放映で接することが多かったのではないだろうか。そのように考えれば、ジャンルの区分は相対的なものにすぎない。昨今はメディア・ミックスといわれるように、複数のメディアをつうじて展開される作品も少なくない。映画やテレビ番組、マンガ・アニメ、小説などのジャンルは必ずしも別個の入り口とは見做さないほうがよいのかもしれない。事実シャーロック・ホームズや三國志などは小説でも挙げられており、ゲームでも、三國志は言わずもがな、Call of Duty や Hearts of Iron など世界大戦を題材にしたものが受け容れられているのは、ゲームという性格上、対戦型であることにも親和性があるのだろう（32 件＝約 13 パーセント）。さらに、ゲームでは Fate シリーズがマンガ・アニメや映画でも展開しており、これは世界史の基礎知識を前提に作られているという。

興味を抱くようになるきっかけは一度きりで一つとは限らない。最初は消費者としていくつかのメディアを渡り歩きながら、次第に外国史への関心を強化するというような学習のあり方も見えてくるようにおもわれる。あるいは、高校の世界史の授業で習ったのが最初のきっかけであったのが、やがてそれ自体は記憶から薄れ、メディアにのめり込むうちにまた授業に戻ってくるという相関性も考えられるだろう。

一方で、海外旅行・研修・留学のような直接体験も 18 件で約 7.3 パーセントある。アンケート調査の全体の数

値では 1495 分の 100 で約 6.7 パーセントなので、同等かそれ以上の数値である。また、外国語学習では、おもに英語の授業をきっかけとすると見做してよいだろうが、その数値は予想よりも小さい（15 件＝約 6 パーセント）。外国語は、その国の「歴史」への興味と直接に結びつくわけではないということであろうか。

さて、それではつぎに、岩手大学での集計結果を図にして降順にするとつぎのようになる。

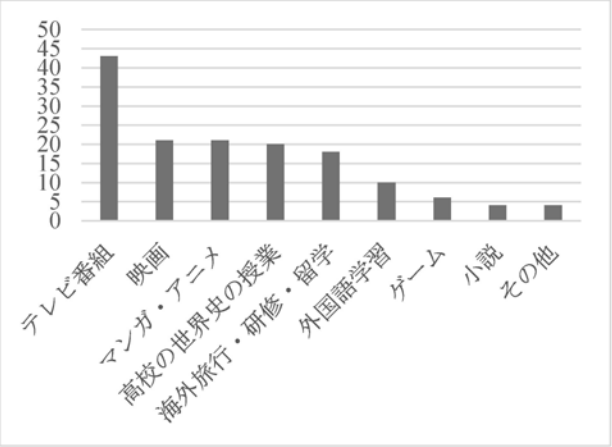

図 3：外国の歴史に興味を抱いたきっかけ（岩手大学）

テレビ番組をきっかけとしたものが約 30 パーセントを占め、映画、マンガ・アニメに続き、高校の世界史の授業では約 14 パーセント、海外旅行・研修・留学が約 12 パーセント、外国語学習では約 7 パーセントである。ゲームが約 4 パーセントで盛岡大学でのアンケート結果にくらべて著しく低いのが特徴である。外国語学習は同率であり、海外旅行・研修・留学が相対的に高い。

さらに、岩手県立大学盛岡短期大学部ではつぎのようになる。

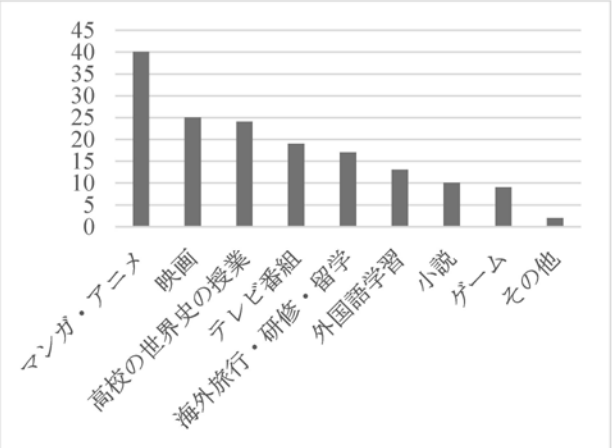

図 4：外国の歴史に興味を抱いたきっかけ（岩手県立大学盛岡短期大学部）

ここでは岩手大学とは反対に、テレビ番組をきっかけとするものが後退し、マンガ・アニメと入れ替わっているように見える。だが、これはすでに述べたようにとくに区分すべきではないだろう。とすれば、高校の世界史の授業が 24 件で約 15 パーセント、外国語学習が 13 件で約 8 パーセントであり、3 校いずれも 1 パーセント前後の違いでほぼ同率であることが判明する。つまり、この二つを組み合わせれば外国の「歴史」への鉄壁の入り口になるといえる。そして、その機会が豊富にあるとはおもわれない海外旅行・研修・留学がつねに外国語学習のすぐ上位にあるということは、それらの二つのジャンルないしカテゴリーが本来、相関関係にあるものとは考えられないだろうか。

かりに、テレビ番組、映画、マンガ・アニメ、ゲーム、および小説を「メディアをつうじたきっかけ」と分類し、これに対して、高校の世界史の授業、海外旅行・研修・留学そして外国語学習を「対面式のきっかけ」と分類してみたい。すると、盛岡大学では前者が 165 件で約 67 パーセント、後者が 73 件で約 30 パーセントとなる。岩手大学では、95 件に対し 48 件で約 66 パーセントと約 34 パーセント、さらに、岩手県立大学盛岡短期大学部では、前者が 103 件で約 65 パーセント、後者が 54 件で約 34 パーセントとなる。

いずれも 7 対 3 に近い値になる。これは要するに現在の学生（生徒）の生活様式を表現しているのである。

少し議論を深めておきたい。

およそ学習機会としては一般につぎの三つの場が想定されるだろう。学校、塾などのフォーマル・スペース、自宅などのプライベート・スペース、そして図書館やカフェなどの公共の場を利用したコモン・スペースである。大学図書館等に設置されているラーニング・コモンズがこのコモン・スペースを正式に教育過程に採り入れる試みであることは言を俟たない。すると、上記で二つに分類した「メディアをつうじたきっかけ」と「対面式のきっかけ」は、それぞれ、プライベート・スペースとフォーマル・スペースでの学習機会と言い換えることができる。つまり、プライベートでの機会が 7 割、フォーマルな場での機会が 3 割、これが基本的な配分になっているのである。はたしてそれを理想的な配分とするかどうかはもちろん議論の余地があるとはいえ、対策としてはあくまでプライベートでの学習機会を尊重しながらそれ以外の機会を改善するのが適切とおもわれる。

そしてそのさい現今で欠落しているように見えるのがコモン・スペースである。上述のように一部の大学図書館においてラーニング・コモンズが機能不全に陥っているのだとすれば、教育課程としてのコモン・スペースの活用法に課題があるといえる。さらに言えば、フォーマル・スペースで活動する教員が、学生や生徒のプライベ

ートでの学習機会に関与し、いくらかでも外国史への動機づけをあたえる可能性があるとすれば、その中間にあるコモン・スペースのあり方こそ考察せねばならない。それは学習プログラムを含めてのことであり、空間的な意味だけではない。

3-3. 外国史に興味がない理由

さて、外国の歴史に興味がないと回答した約3割強ではつぎの選択肢からその理由を選ばせた。ただし、紙幅の都合から盛岡大学での集計結果のみを抽出する。

外国に興味がない	21
日本史は好きだが外国史は興味がない	12
暗記が嫌い	12
過去の出来事に関心がない	10
実生活に役に立たない	9
学校の授業が嫌いだった	9
テストの点数が悪かった	8
その他	1
計	82

これを図にすればつぎのようになる。

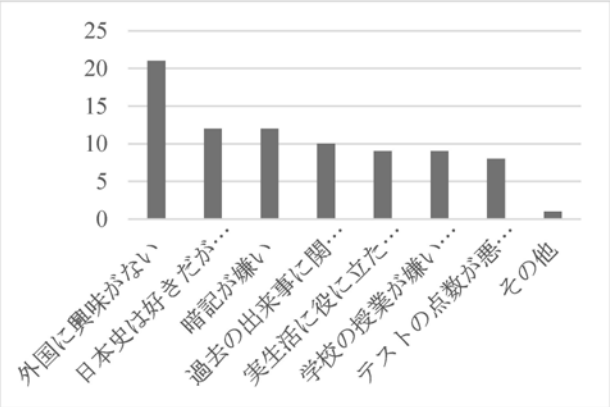

図 5：外国の歴史に興味がない理由（盛岡大学）

アンケート調査の全体の集計と比較すると、全体では「テストの点数が悪かった」（35件＝約8パーセント）をのぞき、いずれの選択肢も約15パーセント前後であったのに対し、盛岡大学では「外国に興味がない」（21件＝約26パーセント）が頭一つ抜けて高率であった。しかし、いちおう区分してみたものの、これらの理由は相互に影響し合って回答者を外国史から遠ざけているに違いない。たとえば、暗記が苦手（よく聞かれるようにカタカナを覚えるのが苦手。「その他」の1件はまさにこれ）であり、テストの点数も芳しくなく、授業に身が入らず、実生活に役に立たないと判断し、さらにはそもそも興味がないと切り捨てる。実際にこの順序を辿るかどうかは別として、むしろここでは「日本史は好きだが外国史は興味がない」という回答に注目し、その授業でのエピソード（自由記述）を摘記しておきたい。

・覚えることがとても多い印象でした
・何一つ理解できずにテストを受けて大爆死した。前日他の教科放って世界史勉強したのにテスト用紙に「時間不足!!」と書かれてブチ切れた
・テスト直前に一生懸命暗記していた
・テストの点が悪く世界史の単語を死ぬほど書いた
・ヨーロッパの戦争？戦いでやたら発音できない長い名前の人物が出てきてテスト勉強がんばったのですが、出なかったことがあります
・世界史は取ってませんでした。基本の基本みたいな時の記憶もありません
・高校ではセンター試験でとるわけではないが世界史Aと世界史Bを両方受けなければならなかった。Aをとることで Bに役立ったかといわれれば微妙なところがあるし、両方受ける意味があるのかと疑問であった
・イギリスなどヨーロッパの建物が綺麗だったのでその授業は印象に残っています
・世界史の先生が高齢だったため、昔、奥さんと頻繁に海外へ行った実体験をもとにした授業だったこと

このように、単語暗記やその進度テスト、あるいはカリキュラム上の問題によって翻弄され追い詰められたことで、外国史（世界史）に嫌悪感を抱いたことが明白である。そしておそらく、そうした暗記科目としての側面を緩和するために教員が体験談を織り交ぜた授業を実施したことも残念ながら裏目に出ている。ただし、これとは別に、「試験で赤点をとって、もの凄い量の補習課題を課せられた」と記入している回答者の一人は、外国史に興味が「ある」としており、テストがつねに興味をスポイルするわけではないことにも注意せねばならない。

他方で、ヨーロッパの建築物の美しさが心に刻印されたという回答は外国史学習の可能性を示唆しているようにおもわれる。ちなみに、興味が「ある」との回答のうちの「その他」には、「高校生のときに合唱で、西洋の古い音楽を歌い、詩の内容や音楽性に感銘を受けた」、「アーティスト、ブランド、SNS」、また、きっかけとなったものとして「LOUIS VUITTON、Dior」などというものも記入されていた。優れた芸術文化との接触は歴史への興味を喚起するのである。

4. むすびにかえて

以上、とくに岩手県に所在する大学3校を対象にアンケート結果を分析したことで、少なくともおよそ6割以

上の学生は外国の歴史が意識のどこかにあり、興味または親近感を抱いていることが判明した。そのきっかけとしては、海外旅行・研修・留学のような直接体験では1割に満たないにしても、高校の世界史の授業または外国語学習（英語の授業）と併せれば3割に近かった。それ以外の7割はメディアをつうじたいわば間接的な体験であるが、複数のメディアを行き来しながら興味を強化するようすも垣間見えた。反対に、興味がないという場合は、教科としての世界史の暗記学習に疲弊して、ある段階で意識から切り離してしまったとも考えられる。

本稿では、横断的な分析により地域的な特性も析出されるかと予想したが、しかし析出されたのは地域でも大学間の差違でもなく、学習者の生活様式にもとづいた共通の基盤であったといえる。したがって、自主的・能動的な学習（アクティブ・ラーニング）には、この7割におよぶプライベートでの学習機会を尊重し、他の機会と結びつけなければならないのである。そうでなければ、授業という機会、言い換えれば学習者への吸収支援や理解支援のあり方を改善するのは難しいだろう。

また、ここではアンケート結果における高校世界史の授業での印象に残った「肯定的な」エピソードを取り上げることができなかった。だが、今後は縦断的に、一つの人格のなかでの生活史に沿った個別の聞き取り調査により、外国史学習に関する動機づけの、より詳細なメカニズムが明らかになるはずである。

5. 参考資料・文献

・資料

日本政府観光局（JNTO）（2017）日本の観光統計データ、2017年都道府県別訪問率ランキング

浦崎太郎（2018）アクティブラーニングの現状（2）高校と大学、社会、3者の認識のギャップ、大正大学地域構想研究所（https://chikouken.jp/report/7757/）

外務省領事局旅券課（2019）、旅券統計（平成30年1月～12月）、平成31年2月

John Augeri (2019) Learning Spaces around the world: Global Trends in Design, Perspectives & Challenges、東北大学大学院教育学研究科教育研究国際シンポジウム：主体的な「学び」へのエンゲージメント、2019年12月21日於東北大学教育学研究科（口頭発表レジュメ）

吉植庄栄（2019）日本の高等教育改革と大学図書館の変化：S.R.ランガナタンが見たかったもの、同上、（口頭発表レジュメ）

・文献

八島智子（2001）「国際的志向性」と英語学習モーティベーション、外国語教育研究創刊号、33－47

Bin Zou, Michael Thomas (2018) Handbook of Research on Integrating Technology into Contemporary Language Learning and Teaching

小川幸司（2009, 2017）補論　世界史教育のありかたを考える―苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている―、世界史との対話　70時間の歴史批評（上）、地歴社、315－331

吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎（2016）世界史履修に関する短大生の意識調査、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第18号、59－64

鈴木道也・吉原秋・小川春美・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎（2016）大学における世界史教育の現状と課題（1）―世界史学習に関する大学生たちの意識調査―、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第18号、65－71

吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎・池野健（2017）世界史履修に関する学生の意識調査と今後の研究の展望、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第19号、63－66

小川知幸・吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萠・畑奈保美・津田拓郎（2017）高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第19号、67－73

鈴木道也・吉原秋・小川春美・安井萠・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎・池野健（2018）大学における世界史教育の現状と課題（2）―世界史学習に関する大学生たちの意識調査―、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第20号、47－56

吉原秋・小川春美・マーハー パトリック・鈴木道也・安井萠・小川知幸・畑奈保美・出村伸・津田拓郎・池野健（2018）世界史教育と外国史教育との連携・協働のための予備調査報告、岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集第20号、57－61

※本稿は2019～2021年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「学習者の視点から探る世界史学習の内発的動機づけ―国際的志向性の観点から」（研究課題領域番号19K02878、研究代表者・安井もゆる）による成果の一部である。

別表：外国の歴史に興味を抱いたきっかけ（盛岡大学）

テレビ番組
世界ふしぎ発見！
世界の果てまでイッテ Q！
世界遺産
世界ふれあい街歩き
岩合光昭の世界ネコ歩き
世界の車窓から
世界はほしいモノにあふれてる
世界の村で発見！こんなところに日本人
シェイクスピア
LAW & ORDER
スーパーナチュラル
フルハウス
glee/グリー
リバーデイル
韓国時代劇
Disney Channel
Discovery Channel
マンガ・アニメ
ヘタリア
キングダム
マギ
ジョジョの奇妙な冒険
王様の仕立て屋
世界の伝記
黒執事
SKET DANCE
きかんしゃトーマス
トムとジェリー
映画
ハリー・ポッターシリーズ
ファンタスティック・ビースト
ペンタゴン・ペーパーズ／最高機密文書
三國志
レッドクリフ
英国王のスピーチ
ボウリング・フォー・コロンバイン
スパルタカス
サウンド・オブ・ミュージック
トランスフォーマー
ハンニバル
RAW 少女の目覚め
トワイライト～初恋～
プライベート・ライアン
アラジン
マトリックス
キング・アーサー 英雄転生
シャークネード
パイレーツ・オブ・カリビアン
アイアンマン
スパイダーマン
風と共に去りぬ
バットマン
ブレイブハート
ヒトラー ～最期の 12 日間～
ワイルド・スピード
ナショナル・トレジャー
アメリカン・ヒストリーX
アメリカン・スナイパー
グラディエーター
フューリー
シャーロック・ホームズ
ゲーム
Fate シリーズ
Call of Duty シリーズ
Hearts of Iron シリーズ
Battlefield シリーズ
World of Tanks
アサシン クリード シリーズ
三國志シリーズ
真・三國無双シリーズ
サイレントヒル シリーズ
アーマード・コアシリーズ
小説
リア王
オルレアンの少女
異邦人
ゾロアスター教（解説書）
世界の童話
シャーロック・ホームズ
カラマーゾフの兄弟
存在の耐えられない軽さ
百年の孤独
エジプトの秘密（解説書）
空気の精
アンネの日記
その他
LOUIS VUITTON
Dior

（以上、カテゴリー内は順不同）